

2023年11月5日 主日礼拝

説教題「世を救うために来られた方」ヨハネ福音書 12 章 44～50 節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである」(ヨハネ福音書12章47節)

先週の二日間、大島博幸先生の特別講演会を通して与えられたさまざまな恵みを感謝します。講演会に先立つ一か月間、私たちは福島主のあしあと教会で生まれた「神の家族」という賛美歌を毎週歌いながら講演会に備えることができたのは、楽しい恵みでした。気がつくと、いつのまにか普段の生活の中で「神の家族」を口ずさんでいる自分がいました。賛美歌は日曜日の教会の礼拝でみんなと歌うためだけでなく、日々の暮らしの中で神さまの慈しみを想い、口ずさむために与えられているのです。そして主日礼拝は、礼拝時間が終わったら「おしまい」なのではなく、主の日からの一週間の「はじまり」であり、その週の一日一日を「神さまの恵みとずっと共に歩み続けるため」の礼拝であることを改めて知らされています。

さて少しずつ秋が深まり、クリスマスを迎える準備をする季節となった今、馬小屋にお生まれになった方が私たちに届けてくださった「神の救い」について聖書から聴いていきたいと願っています。

今朝の聖書箇所は、主イエスが十字架につけられるためにエルサレムに上られた時の一場面です。この箇所を学び直しながら、とても大切な言葉が用いられていることに気づきました。それは 44 節「イエスは叫んだ」という言葉です。「語った」ではなく「叫んだ」。主イエスが主語で「叫ぶ」という動詞の組み合わせは多くはなく、マタイ・マルコ・ルカの福音書で主イエスが「叫ばれた」のは十字架の上でだけです。

「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（我が神、我が神、なぜわたしをお見捨てになるのですか）と「主よ、あなたの手にわたしの霊を委ねます」という言葉を主イエスは大声で叫ばれ息を引き取られました。語られている内容は正反対のように聞こえますが、どちらも十字架という絶望の暗闇の中で見えない神を心から求めた叫びであり、主イエスが「まことの人として神に向けて発した叫び」でありました。

一方、ヨハネ福音書では主イエスが叫んでおられるのは二回で、いずれも「人に向けて発した叫び」なのです。一つは 10 章で、死んで墓に葬られていたラザロに向かって「ラザロよ、出てきなさい」と大きな声で叫ばれた場面。死は私たち人間の力では 1 ミリたりとも動かせない現実です。死の現実の前に人間は無力です。すべてのことをあきらめざるを得ない。けれども主イエスは違います。死の闇に飲み込まれたラザロを命に向けて起こされるのです。ここで主イエスはご自身を遣わされた神さまの言葉をもって語っておられる。つまり主イエスは「死の闇の力を打ち破る命の言葉を、まことの神として私たち人間に向けてぶつけられた叫び」、それが「ラザロよ、出てきなさい」という言葉でした。

そしてヨハネ福音書でもう一か所、主イエスが叫んでおられるのが、今朝の場面です。44節以下の言葉がそうですが、その内容はというと「主イエスを信じ、主イエスを見る者は、主イエスを遣わされた方（父なる神）を信じ、見るのだ」ということ。

「主イエスを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまらないように、主イエスは光として世に来た」ということ。そして「主イエスの言葉を聞いて守らない者がいても、主イエスはその者を裁かない。主イエスは世を裁くためではなく、世を救うために来た」ということです。主イエスは「神を証しする方として、私たちを裁くのではなく、どこまでも救う方として来られた」のです。それに対して私たちは裁きの言葉は持っている、救いの言葉を持ち合わせていません。裁き合って人を傷つけることはしても、ほんとうの意味で人を救うことができない。そのために悲しみと叫びがあふれ、絶望の暗闇の閉ざされているのがこの世界です。そのように暗闇に閉ざされ、もがいている私たちを光で照らし、救い出すために、主イエスは来てくださったのです。

ただ、そのあと48節以下はどういう意味なのでしょう。「わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く」。「終わりの日」とは、神さまの愛と正しさが私たち人間の目にもはっきりと示される日のことです。主イエスを信じる者にとって、またすべての人にとってそれは希望の日です。人間のすべての傲慢、過ち、歪みが正されて、人間のすべての悲しみや苦難が癒される日だからです。ただ、その「終わりの日」に裁くものがある。それは「わたしが語った言葉だ」と主イエスは言われます。主イエスが語られた言葉。それはひと言でいえば神の「真実の愛」です。私たち人間は「神の真実の愛によって裁かれる」というのです。それはどういうことでしょうか。

例えば「放蕩息子のたとえ」があります。弟は父の大切な財産を放蕩三昧で使い果たし、行き詰まった時に初めて自分の過ちに気づきます。彼は心の中で言うのです。

「お父さんのもとに帰ってこう言おう。わたしは天に対してもお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」と。しかし父のもとに帰った彼は、自分の想像をはるかに超える父なる神の大きな愛を知らされます。神さまは自分が過ちに気づいて帰る前から、自分を赦し、祈り、待ち続けていてくれた。この神さまの大きな真実の愛と赦しを知らされた弟はどう思ったでしょうか。その時こそ、彼の中に本当の意味での悔い改め、神さまに対する方向転換が起こされ、「もうこの神の愛から離れては生きていけない。神の愛に応答する者として生きていこう」という確かな決意を与えられたことでしょうか。ここで起こっていることが「神の真実の愛による裁き」です。神の真実の愛こそが、私たち人間の傲慢と過ちと歪みを正します。そして私たちを暗闇の中から救い出し、命の光に照らされ生きる者に変えるのです。

そのようにして、この世界の様々な暗闇に毎日押しつぶされそうになっている私たちを光で照らし、どこまでも救う方として来られた主イエスが、私たちに向けて発せられた命の叫びを、大切に受けていきたいのです。